

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにおける英語教育の試み

The English Language Program at Keio University, SFC

霜崎 實(慶應義塾大学環境情報学部)

本発表では、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにおける英語教育の試みについて、その概要を述べる。まず第1節において、外国語教育全体の枠組みについて概説する。第2節では、英語のインテンシヴ・プログラムの構成と、カリキュラムを設計する際の基本的な考え方を述べた上で、具体的な授業形態の例を紹介する。最後に、第3節で今後の検討課題について触れる。

1. 外国語教育全体の枠組み

1.1. カリキュラムの構成と単位数

外国語関係カリキュラムは、(1) 総合講座、(2) インテンシヴ・コース、(3) 教養外国語から構成される。提供される学年、学期、および単位数は以下の通りである。

1 学年	春学期	総合講座「諸国語概説」	90分 x 1 コマ/週 (2 単位)
	秋学期	Intensive Course (I)	50分 x 8 コマ/週 (4 単位)
2 学年	春学期	Intensive Course (II)	50分 x 10 コマ/週 (4 単位)
	秋学期	Intensive Course (III)	50分 x 6 コマ/週 (4 単位)
3 学年	春学期	教養外国語	90分 x 2 コマ/週 (4 単位)

卒業に必要な外国語科目(インテンシヴ、および教養外国語)の単位数は16単位である。ただし、1 学年の春学期の「総合講座」(一般教育科目: 2 単位)も必修である。インテンシヴ・コースの週あたりの授業時間数は言語により多少異なる。上の表は英語の場合を示したものである。外国語教育の中心は1 学年秋学期から始まるインテンシヴ・コースであるが、3 年次では、インテンシヴ・コースで履修しなかった外国語を「教養外国語」として履修することになる。また、英語以外の言語については3・4 学次に履修可能な中・上級コース(自由科目)が設けられている。

1.2. 第1 外国語の選択性導入

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスでの外国語教育プログラムの最も大きな特徴は、第1 外国語として履修できる言語を英語だけに限らず、6 言語(英語、独語、仏語、中国語、朝鮮語、マレー・インドネシア語)のうちいずれかを選択できるような方式を導入したことである。これは、従来の第2 外国語教育の非能率性の反省の上に立ち、またアジア言語重視の方針から導入されたものである。

1.3. 総合講座「諸国語概説」の導入

第2 の特徴としては、1 学年の春学期に通常の外国語の授業が行われず、代わりに「総合講座: 諸国語概説」という一般教育科目が必修として提供されていることである。「総

9月10日(木) 事例研究第3室(国際会議場3階第3会議室)

合講座」では、外国語学習についてのオリエンテーションを行うのと同時に、インテンシヴ・コースの6言語について言語的特徴・文化的背景などをオムニバス形式で概説するもので、外国語の履修科目の選択に必要な基礎的知識が与えられる。「総合講座」は第1外国語の選択性を可能にするためには欠くことのできない講座である。

2. 英語インテンシヴ・プログラム

2.1. 構成

英語のインテンシヴ・プログラムでは1年次の春学期に実施されるTOEFLによる運用能力別クラス編成が採用されている。1学年秋学期のクラス編成はインテンシヴ・コースを通じて原則として変わらないが、学生の能力を考慮して一部クラス変更を認めている。

1クラスの学生数は平均して32～3名で、学年平均で約500名の学生が16クラスに分かれて授業を受けている。

授業は日本人教員とネイティブ・スピーカー(NS)が担当する。教員構成は以下の通りである。

	日本人	NS	合計
専任教員	6名	3名	9名
準専任教員	0名	5名	5名
非常勤教員	9名	7名	16名
合計	15名	15名	30名

2.2. カリキュラムの基本的考え方

英語プログラムの設計に際して、次のような点に配慮している。現在、以下の基本方針のすべてが充分に実現されているとは言えないが、今後のカリキュラムの変革により、こうした基本方針を生かしていきたいと考えている。

- (a) 教師中心から学生中心へ
- (b) コミュニケーション能力の開発にむけて
 - －知識としての英語から運用のための英語へ
 - －受信型から発信型へ
- (c) 知的刺激に満ちたプログラムへ
- (d) 大学教育全体のカリキュラムに組み込まれた英語教育へ
 - －専門教育との関係(「英語教育カリキュラムについてのアンケート」参照)
 - －英語プログラム・サポート・システムの確立
(ビデオ・ライブラリー、海外研修プログラムなど)
- (e) 大学教育へ波及効果を持つプログラムへ

2.3. 英語運用能力の開発を目指す具体的授業形態の例

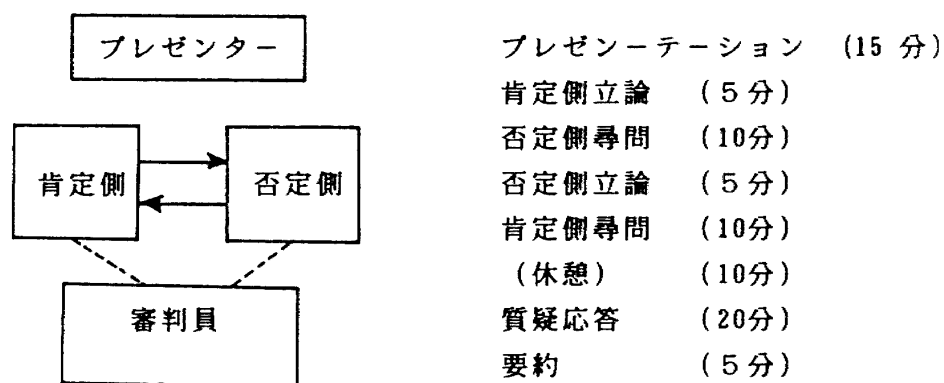
さまざまな授業形態が試みられているが、英語の運用重視、コミュニケーション能力養成の重視という点では共通している。ここでは、ディスカッション中心の授業、およびディベートを取り入れた授業の試みについて述べる。

まず、ディスカッション中心の授業の1形態として、次のような流れが考えられる。

- (1) 英語の資料(論争を引き起こす内容を含む)を配布。内容の口頭発表のグループを指定。
- (2) 宿題として: 資料について不賛成の箇所を指摘し、なぜ筆者の意見に不賛成なのか、その理由をレポートにまとめる。(提出)
- (3) 資料の内容についての口頭発表。(プレゼンテーション・グループによる)
- (4) 5～6人のグループに分かれてのディスカッション。(特に、筆者への反論を中心に)
- (5) クラス全体での意見交換。(進行役は学生あるいは教員)

次に、ディベートを取り入れた授業の概要について述べる。

- (1) 準備として
 - ーディベートの意義・形式・目的についての講義。
 - ープレゼンテーションの仕方についてビデオを見せる。
 - ープレゼンテーションおよびディベートのための表現練習(プリント用意)。
- (2) グループ・ディスカッションによる論題の決定
- (3) グループ分け(プレゼンター5名・肯定側5名・否定側5名・審判員15名)
- (4) 調査(1～2週間)
- (5) ディベート



3. 検討事項

慶應大学での英語教育の新しい試みはまだ始まったばかりである。まだ完成されたものとは程遠い。さまざまな検討課題が残されているが、以下にその幾つかを列挙しておくことにする。

- (1) 認定制度の導入について
- (2) 中級・上級英語について
- (3) 選択科目の導入について
- (4) コーディネーションについて

9月10日(木) 事例研究第3室(国際会議場3階第3会議室)

1. 外国語教育全体の枠組み

1.1. カリキュラムの構成と単位数

1 学年	春学期	総合講座「諸国語概説」	90分 x 1 コマ / 週 (2 単位)
	秋学期	Intensive Course (I)	50分 x 8 コマ / 週 (4 単位)
2 学年	春学期	Intensive Course (II)	50分 x 10 コマ / 週 (4 単位)
	秋学期	Intensive Course (III)	50分 x 6 コマ / 週 (4 単位)
3 学年	春学期	教養外国語	90分 x 2 コマ / 週 (4 単位)

(注1) 卒業に必要な外国語科目単位数は16単位。総合講座は一般教育科目。

(注2) Intensive Course の週あたりの授業時間数は言語により多少異なる。

(注3) 教養外国語(スペイン語)は3学年の秋学期にも提供される。

(注4) この他に英語以外の言語については3・4学年において中・上級コース(自由科目)が置かれている。

1.2. 第1外国語の選択性導入

言語	クラス数(定員)
英語	16クラス(480名)
ドイツ語	4クラス(120名)
フランス語	4クラス(120名)
中国語	3クラス(90名)
朝鮮語	2クラス(60名)
マレー・インドネシア語	1クラス(30名)
合計	30クラス(900名)

1.3. 総合講座「諸国語概説」の導入

(a) 構成

- ーオリエンテーション(2週間): 外国語プログラムの紹介
- ー各国語週間(6週間): 開講されている6外国語の紹介
(パネル・ディスカッションなど)
- ー入門コース(3週間): 各言語への導入。英語の場合はフィルム・コース。

(b) 履修言語の選択と履修申告方法

- ーアジア言語(中国語・朝鮮語・マレー・インドネシア語): アジア言語週間が終了した次の週から先着順で受け付け、定員に達した時点で締め切り。
- ーヨーロッパ言語(英語・独語・仏語): アジア言語履修申告開始より2週間遅れて受け付け、必要に応じて人数調整を行う。

2. 英語インテンシヴ・プログラム

2.1. 構成

- (a) 能力別クラス編成(1学年の春学期に実施するTOEFLによる。)

基本的には1学年秋学期のクラス編成はIntensive Courseを通じて変わらないが、学生の能力を考慮して一部クラス変更を認めている。

- (b) 日本人教員とネイティヴ・スピーカー(NS)による授業形態

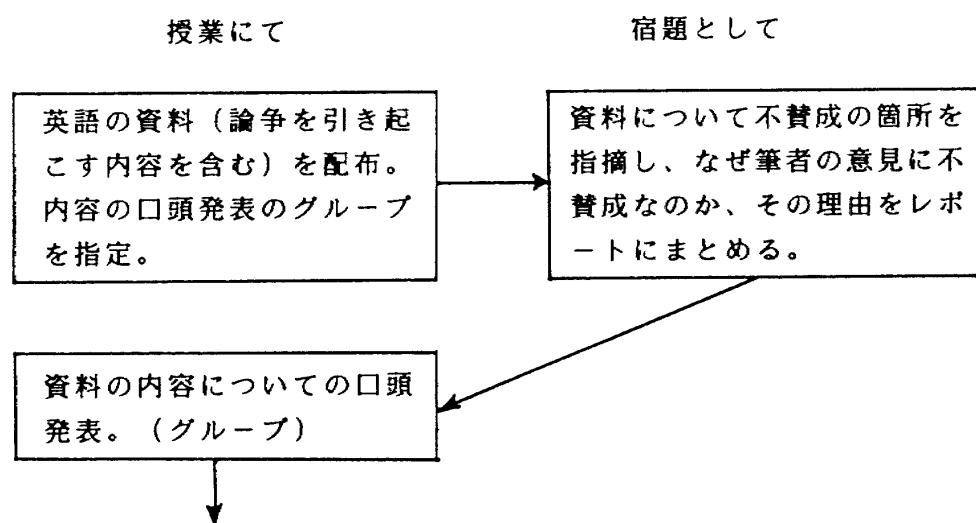
	日本人	NS	合計
専任教員	6名	3名	9名
準専任教員	0名	5名	5名
非常勤教員	9名	7名	16名
合計	15名	15名	30名

2.2. カリキュラムの基本的考え方

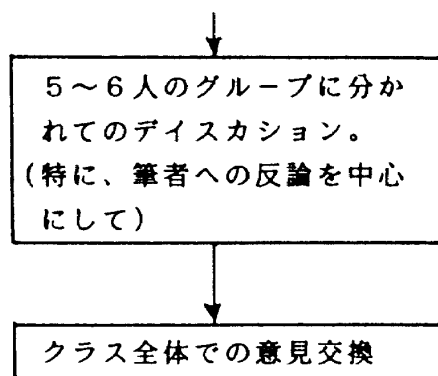
- (a) 教師中心から学生中心へ
- (b) コミュニケーション能力の開発にむけて
 - －知識としての英語から運用のための英語へ
 - －受信型から発信型へ
- (c) 知的刺激に満ちたプログラムへ
- (d) 大学教育全体のカリキュラムに組み込まれた英語教育へ
 - －専門教育との関係(「英語教育カリキュラムについてのアンケート」参照)
 - －英語プログラム・サポート・システムの確立
(ビデオ・ライブラリー、海外研修プログラムなど)
- (e) 大学教育へ波及効果を持つプログラムへ

2.3. 英語運用能力の開発を目指す具体的授業形態の例

- (a) ディスカッション中心の授業



9月10日(休) 事例研究第3室(国際会議場3階第3会議室)



(b) デイベイトを取り入れた授業

(1) 準備として

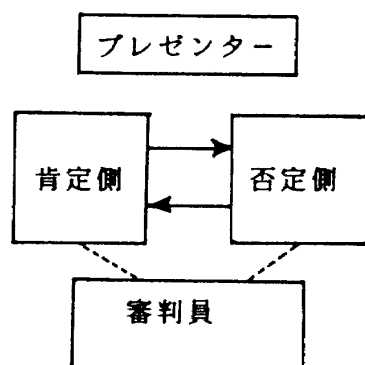
- ーデイベイトの意義・形式・目的についての講義。
- ープレゼンテーションの仕方についてビデオを見せる。
- ープレゼンテーションおよびデイベイトのための表現練習(プリント用意)。

(2) グループ・ディスカッションによる論題の決定

(3) グループ分け(プレゼンター5名・プロ5名・コン5名・審判員15名)

(4) 調査(1～2週間)

(5) デイベイト



プレゼンテーション (15分)

肯定側立論 (5分)

否定側尋問 (10分)

否定側立論 (5分)

肯定側尋問 (10分)

(休憩) (10分)

質疑応答 (20分)

要約 (5分)

(6) 論題について、授業での討論を参考にして自分の意見をレポートにまとめる。

3. 検討事項

- (a) 認定制度の導入について
- (b) 中級・上級英語について
- (c) 選択科目の導入について
- (d) コーディネーションについて